HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Julietの自立と家父長制の批判
Author(s)	宮下, 弥生
Citation	第39回シェイクスピア学会. 平成12年10月28日～平成12年10月29日. 神戸市.
Issue Date	2000-10-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39211
Type	conference presentation
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	miyashita-1_note.pdf (発表原稿)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Julietの自立と家父長制の批判

第39回シェイクスピア学会 発表原稿

2000. 10. 28

1. 問題の所在

*Romeo and Juliet*において、Julietが両親に従順な少女から精神的にも性的にも大人の女性へと成長を遂げるという見解が一般に受け入れられています。例えば、Majorie Garberは*Coming of Age in Shakespeare*のなかでJulietは自己に対するidentityを確立したことで父親よりも恋人を選ぶことになり、その選択の仕方はJulietの成熟度と自己認識を測る尺度となっていると述べています。しかし、GarberはJulietの性的な成長も含めて大人の女性へと成長していくことを論じつつも、劇の進行のなかにJulietの成長の過程を見るようなことはしていません。一方で、Julietの成長していく過程に目を向けそれを心理学的な発達という視野から論じたのはKatherine Dalsimerで、その著書*Female Adolescence: Psychoanalytic Reflections on Literatrure*のなかで、Julietが思春期以前の少女から若い大人の女性へと成熟していく過程を、両親の世代の者達の若い世代の台頭に対する抵抗という図式をもって説明しています。

さて、Julietが自己認識を獲得していき自立していく過程はこの劇の大切なテーマのひとつとなっている家父長制とも無関係ではあり得ません。Coppelia Kahnは'Coming of Age: Marriage and Manhood in *Romeo and Juliet* and *The Taming of the Shrew*'のなかで、特にRomeoの成長に着目し、Romeoが父親から自分を切り離し、大人へと成長していくということを、家父長制との対立と関連づけて論じています。しかし主人公の成長と家父長制との対立は、その成長がよりはっきりと描かれているJulietの方に光を当てることでより明白に見えてきます。主人公の成長と家父長制とは個々に別々の問題でありながらも、家父長制という視点から見た「娘」というものは父親の所有物であり、家督を有利に増やすための手段に過ぎない一方で、その「娘」自身が成長していくということは自己に対する認識を確立していく過程であり、この両者は対立することになります。

この発表ではJulietが成長していく過程を検討し、彼女が自己認識を深めていく過程が家父長制との対立を顕在化していく過程を示すことになっていることを論じてみたいと思

います。

2.　冒頭におけるJulietの状態、今後の自立への萌芽

　さて、DalsimerはJulietが最初に登場する１幕３場ではまだ彼女が思春期に入っていないと述べていますが、果たしてそうなのか、劇の冒頭部分でのJulietの状態を再度確認する必要があります。実は1幕３場でJulietが登場する前に１幕２場ですでに父親のCapulet氏の目を通してJulietが成長のどの段階にあるのかが描かれています。ハンドアウトの（3）をご覧ください。ここでは表向きにはCapulet氏はJulietがまだ世間知らずで14歳にもならず結婚するにはまだ早いと述べていますが、The Oxford Shakespeareのこの劇のの編者、Levensonはここの'pride'という語に'prime,' 'flower'という夏の真っ盛りという意味だけではなく、特に女性の'sexual desire,' 'heat'の意味もあることを指摘しています。つまりCapulet氏の意図している「あとふた夏がその盛りを過ぎる、あと二年が過ぎる」という発話レベルとは別のテクストのレベルでJulietに「性欲」という意味を付与することで、今後のJulietの性的な成長を先取りするものとなっていることがわかります。

　では次に実際にJulietが登場してくる１幕３場でのJulietの状態を検討してみたいと思います。Dalsimerはこの段階ではまだJulietが思春期に入っておらず、母親の勧める結婚話に対しても子供らしい従順さをもって応じていると述べています。この場は105行あるうちJulietが口を開くのはほんの５回、わずか７行のみです。結婚話を持ちかける母親と話がすぐに横道にそれてしまうおしゃべりの乳母と比較するまでもなく、その科白の分量の少なさからもJulietの寡黙さが強調されています。しかも母親に呼び出しに対して、"Madam, I am here, what is your will?"（1.3.7）と応え、結婚話に対してもハンドアウトの（5）のように応じて、あくまでも母親の同意の範囲でという模範的な答えをしています。

　しかし、この場面を吟味してみると劇のこの初期の段階ですでにJulietは思春期に入っており、その言葉の中にその後顕在化していく自立への萌芽が見て取れることがわかります。まず、ハンドアウトの（6）にあります乳母の科白を見てみたいと思います。この乳母の描写は幼い頃のJulietの思い出話に過ぎず、一見今のJulietの状況を示すものとは受け取れないように思えますが、ここでも先程検討したCapulet氏の科白同様、この時点で

のJulietと性行為が結び付けられ、さらに今後のRomeoとの初夜を予想させる結果となっています。

またJuliet自身のわずかな科白の中にも今後の成長を予想させる自立への萌芽がうかがえます。乳母がJulietが幼かった頃の卑わいな思い出話に自ら悦に入っているのに対して、Julietは直前の乳母の言葉尻をとらえおどけながらも"And stint thou too, I pray thee, Nurse, say I."（1.3.59）という命令文の強い口調でその話をやめるように言っています。さらにこの乳母の卑わいな冗談の内容を理解してそれを嫌がっているということ、またこのような乳母に育てられてきたことも考慮に入れると、Julietは性的な事柄について少なくとも知識レベルでの理解はしていることがわかります。そしてこれは３幕２場冒頭の初夜を待ちこがれるJulietの科白に容易につながっていくものだと考えられます。

さらに上にあげた母親に対する答えの中にもJulietがすでにある程度自立した自己を確立しているのが見て取れます。Capulet婦人は娘に、まだ会ったこともない結婚候補について、"What say you, can you love the gentleman?"と尋ねていますが、この質問は彼女自身はおそらく若い頃に家父長制というものに何の疑問も抱かずに親の言うがままに資産家のCapulet氏と結婚し、愛するということについてはいまだに全く無理解であることを自ら暴露するものとなっています。この母親と比較してみると、Julietは自らの目でまず見るということ、そして自ら好きになるということが自分の結婚の条件であることをすでに自覚しているのです。（そして、この後見て好きになるということがRomeoとの出会いで現実のものとなるとき、このJulietの科白はアイロニカルな様相を帯びてきます。）この段階のJulietを考えてみると、すでに両親から情緒的にも分離し、自らの独立した判断を下せる力を持っていると言えましょう。Julietの科白の量の少なさと見せかけの従順さは、親に対して距離を置き、別の自分を作って見せられる段階にすでにいることを逆に示すことになっています。そしてこれは後に父親に無理やり結婚させられることになったときに見せる見せかけの従順さにつながる要素をすでにこの時点で持っており、この点でもJulietの成長の過程の連続性が認められます。

以上、１幕２場のCapulet氏の科白と１幕３場の乳母の科白でJulietに性的な要素が付

加されているということ、Juliet自身のわずかな科白の中にもJulietがすでに性的な理解も含めて今後の成長を予想させる萌芽をすでに持っているということを見てきました。ここで再度１幕２場でのParisの求婚へのCapulet氏の返答を見るのは意義深いことです。ハンドアウトの（8）でCapulet氏は娘の選択に自分も同意する理解ある父親であるような素振りを見せていますが、これはJulietの成長にはCapulet氏は全く気が付いておらず、これまでの従順なJulietを信じて疑わないからこそ、このような返答をしているのです。

これまで見てきましたように、この劇の冒頭部分ではJulietが両親の保護のもとで満足している従順な少女であるという見解は誤りであり、この段階ですでに今後の成長と自立を予想させる萌芽をもっているといえましょう。そして家長であるCapulet氏はJulietがすでにこの成長段階にあることに気が付いていないために、家父長制との対立が顕在化していないだけなのです。

3.　家父長制から見たCapulet家の状況---Capulet家におけるJulietの立場

ではこのような状況の中、Capulet家におけるJulietの立場を検討してみたいと思います。まず冒頭のPrologueの第一行目の"Two households both alike in dignity"という言葉で名門の家柄であることが紹介されます。David Cressyは*Birth, Marriage, and Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*のなかで当時の結婚制度の慣習を日記、手紙、自伝といった第一次資料をもとに記述していますが、下層の人々の場合は多くの20代の男女が召使い、徒弟として家を出ており、教区での遊びや地域の祭りなどで親の管理外で出合う機会があり、自然と自分たちの意思で結婚していたことを当時の記録から検証しています。これに対してエリートの家系は家の財産や過度に意識された名誉に縛られており、男性の側が妥当と思われる結婚相手を人づてに見当をつけ、まず父親をはじめとする親族に結婚の申し込みをし、女性に求愛をし、最終的に女性の同意を取りつけるという、規則ではないものの一定の手順に従っていたことを多くの具体例をあげて検証しています。この際の同意を当時の文書では"good will," "good liking"という表現を用いていることからも、積極的な愛情があって結婚へ至るケースは少なかったことがわかります。さて、Julietはshriftに出かけるという口実をもってしか外に出ることもできず、自由に男性と交友を深めることはできない家柄の娘です。結婚相手

についてもParisがJullietに会う前にまず父親に結婚の申し込みをするという今述べた手順に従っています。

ここでParisについて考えてみることでこの劇での家父長制の扱われ方の一面が明らかになります。この劇においてParisの役割が材源であるBrookeの詩よりも拡大されているということがしばしば指摘されていますが、BrookeではParisはJulietがTybalt の死を嘆く場面で始めてplotの必要性から登場させられる人物であったのが、ShakespeareではJulietの真の愛の対象であるRomeoに対置され、Julietの両親が望む格好の結婚相手として最初から登場します。１幕３場でCapulet夫人がParisの良さを説明する際にはハンドアウトの（9）にありますように本の比喩をもってJulietを説得しようとしていますが、わざわざ比喩表現を用いることで心からParisの良さを讃えているのではないことを示しています。さらにこのCapulet夫人の科白の最後の２行は「Julietの方は自分で何一つ失うことなくParisの美徳を得ることができる」という意味の上に、「Capulet家の財産を失うことなく、Parisの資産を得ることができる」という家としての計算を重ねるものになっています。また乳母はParisのことを蝋人形のようにあらゆる完璧さをそなえた人物という意味で"a man of wax"と表現していますが、逆に中身のない人形という意味が結果的に強調されることになっています。このようにその美徳を表現されるときにすら逆にアイロニカルに人間性の深みのなさを示してしまい、人格的にというよりは資産面においてCapulet家の婿として好都合の人物であることが冒頭から強調されています。

さらに劇が進行していってもこのParisの性質は変わることはありません。３幕４場で涙にくれるJulietを見かねたCapulet氏が急に結婚を決め、木曜日でどうかと尋ねたときには、Julietの同意のことは全く頭になく"I would that Thursday were tomorrow."と答えています。その後４幕１場で涙ですっかり顔を汚してしまっているJulietに対して、Julietの気持ちや涙の理由について考えることもなく、その語る"love"という言葉は内容を伴わない空虚なものとして響きます。また４幕５場でJulietが死んだように見える状態で発見されたときのParisの言葉についてハンドアウトの（11）にありますようにDalsimerはParisには、堅苦しく、形式張った、彼をわたしたちから遠ざけるような言葉が与えられていると論じています。このようにParisは乳母の"a man of wax"という言葉

に象徴的に示されているように、最後まで人格的には内容のない、家柄と財産面でのCapulet家の格好の婿としてのflat characterであり続けるのです。

ではここでまた劇の冒頭部分に戻ってCapulet氏が家父長制の視点から見てどのような状況にあるのかを見てみたいと思います。ハンドアウトの（8）の14行目と15行目の２行は同じ語を繰り返し用い、一見同じ内容を繰り返しているかのように見えますが、14行目ではJulietがただ一人残された自分の生きる望みだと明言することで娘思いの父親という姿勢を見せているのに対し、一転、15行目ではCaplulet 家の家督を増やすための有望な娘だと述べるやこの一行は娘思いの父親像というcontextにあってもそれを否定してしまう家長としての視点を持っていると言えましょう。さらにこの２行で同じ語を繰り返して用いていることでその対立の効果はさらに高くなっています。このようにCapulet氏は３幕５場でJulietがParisとの結婚を拒否するときになって初めて専制的な家長に豹変するのではなくこの時点ですでにCapulet氏も家父長制に縛られた、その枠組みの中でしか考えることのできない人物であることがやはり劇の冒頭部分で明らかにされており、Julietの自立と家父長制の今後顕在化していく対立がこの段階ですでに準備されていることがわかります。

４． 強い意志を持った女性へと変化していくJulietと家父長制の対立

さてJulietは劇の最初の部分では、今後の自立への萌芽を秘めつつも少なくとも表面的には従順さを見せていたのが、Romeoとの愛は彼女の性質に明らかな変化をもたらします。筋が最後の悲劇的な結末に向かうにつれて、Julietは数々の困難な状況に立ち向かうことになり、その苦境をRomeoへの愛のために一つ一つ乗り越えようと努力し、最後には自分で決断を下していく強い意志を持った女性へと変化していきます。

３幕５場でRomeoが去った後泣き続けるJulietにCapulet夫人がParisとの結婚の決定を知らせたときにはもはや以前のような従順な娘でいることはできません。（12）にありますように"by Saint Peter's Church, and Peter too"という誓言つきで、母親を恐れることなく拒否しています。結局Julietは父親を怒らせ、母親からも見放され、この場の最後には頼りにしていた乳母からもParisとの結婚を勧められることで自分を切り離していきます。このようにJulietがこれまで保護されてきた親的な人物から切り離されていく過

程は、自分の意思で決断を下すようになっていく過程でもあります。

JulietはLaurence司祭の独房を訪れ、唯一の対処法が"A thing like death"だと言われその薬の効果を聞かされたとき、Julietは死をも恐れない決断を迫られることになります。Julietはその薬瓶を"Give me, give me!"と力強く答え、 "O, tell not me of fear!"と言うことで自ら恐怖心を克服していきます。

そして４幕３場で巧妙に乳母と母親をさがらせてから薬瓶を手にしたときのJulietの科白はハンドアウトの（14）です。乳母と母に助けてほしいという気持ちから実際に"Nurse!"と呼んでみたりはするのですが、結局この決断は自ら下して、自ら行動を起こすことことしかないのだということをこの時点でJulietは悟ります。さらにはこの薬が効かなかったときのためにナイフすら用意して、Romeoへの愛を貫くためには死をも辞さないという決断ができるようにまでなっているのです。このようにRomeoへの愛はJulietを死さえも恐れない力強い決断力を持った女性へと変えていったことがわかります。

一方で家父長制の枠内でしか考えられないCapulet氏がその正体を明らかにするのは３幕５場で涙にくれるJulietをParisと結婚させる取り決めを Julietの同意もなくしたときです。この取り決めを聞いたJulietは（15）にありますように、夫となる人が来て求婚もしないうちにこの急ぎようはと言っています。また、この取り決めをJulietに伝えたかとCapulet夫人に確認するとき、Capulet氏は"decree"という語を用いていますが、これは「法的な権威をもった取り決め」という意味であり、Capulet氏の専制的な性格を表すものとなっています。先程のCressyの研究によれば、求婚する男性は女性を訪ねて、贈り物をし、その同意を取りつけなくてはならず、父親の役割も強制的なものではなく、女性の側でも、受動的ではありながら拒む権利がなかったわけではないと述べています。このような歴史的な背景を考えてみると、Julietの意向を全く無視し、勝手にParisとの結婚を急に決め、Julietに押しつけるCapulet氏の独裁ぶりが浮き彫りにされています。しかもJulietの懇願に耳を貸さないCapulet氏に対して、妻のみならず、召使いの乳母までが"You are to blame, my lord, to rate her so."と非難の言葉を浴びせるとき、逆にCapulet氏の独裁ぶりは実際には力を持たない空虚なものとして戯画化されることにさえなります。さらにもっとこのCapulet氏の戯画化が明白になるのは４幕２場で、Julietが

Laurence司祭の忠告を得てParisとの結婚に同意したときです。Capulet氏の地に足がついていない喜びようと、"I'll play the housewife for this once."と家政婦の役までやろうという張り切りようは、まだ誰も試したことはない薬を手に一縷の望みをかけるJulietの決断と対置されその滑稽さが強調されることになります。

このようなCapulet氏は自分の娘を失うことになっても、家父長制の枠組みから抜け出すことはできません。Julietが仮死状態で発見されたときのCapulet氏の科白（17）は、Julietの死を嘆くものではなく、死、Deathが自分の跡継ぎになってしまい、自分の死後は、自分の財産は全て死のものになってしまうと、Capulet家の家長としての立場から家の財産が子孫へとつながっていかないことを嘆いているのです。

最後の場面でMontague氏とCapulet氏が握手をして古くからの怨恨が解決したときでさえ、Capulet氏は"dowry"（textによっては"jointure"となっていることが多いのですが）という語を用いることで家父長制の枠組みから結局抜け出せなかったことを示しています。さらに、この期に及んでMontague氏とCapulet氏が競って子供たちの高価な像を建てようとしている様は、二人の死の悲しみを引きずりつつも滑稽であることは否めません。

このようにJulietが数々の困難を乗り越えながら力強い意志を持った女性へと成長していく過程は常に家父長制の専制的な性質と対立することになり、その性質を顕在化していく過程となっているのです。

５．結論

この劇の中で著しい成長を見せるのはRomeoではなくJulietの方です。この作品のなかではgender roleの交替がおきていて、薬を受け取るときも、最後に短刀を自分に突きつけるときもJulietは男性的な決断力を持つようになるのに対し、Romeoの方はMercutioの死に際して自分の女々しさを嘆くときから最後に毒薬をあおって自殺するときまでその性格は女性的なものであることはよく論じられています。ですから、家父長制の独裁的な性質を明らかにしていくのはRomeoではなくJulietが成長していく過程なのです。

またShakespeareはこの劇を４日間とちょっとの出来事にしてしまいましたが、これは筋の展開に緊迫感を与えるだけではなく、Julietの成長していく過程にも強烈な力を与

え、さらに際だったものにしています。冒頭では今後の成長を予想させる萌芽を秘めつつ表向きは両親に従順な少女だったのが、最後にはRomeoとの愛を貫くためには死をも辞さない決断力を持つまでに強い女性へと変化しく過程がめまぐるしいまでに強烈に展開されていきます。このJullietの成長過程の密度の濃さがまた家父長制との対立を浮き彫りにさせる力ともなっていると言えましょう。

以上、Julietの成長していく萌芽はすでに劇の冒頭部分で見られるということ、同様にCapulet氏の家長としての在り方も冒頭部分にすでに準備されているということ、JulietがRomeoへの愛を経験することで自己認識を深め、その愛を貫くために強い意志を持つようになり、その過程がCapulet氏に具現されている専制的な性質を顕在化することになっているということを論じてきました。Cressyの挙げている数多くの当時の事例と照らし合わせてみると、Capulet氏の独裁的な性格は明らかですが、さらにこの劇の中ではそれが本質的な力を持たないものとして滑稽にさえ描かれており、家父長制のもつ専制的な性質が戯画化されているのです。